
カレーライス

景雪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カレーライス

【Nコード】

N4531V

【作者名】

景雪

【あらすじ】

真奈美は29歳。信二は32歳。二人は籍を入れていないだけで夫婦同然の生活をしていた。仕事の帰りが遅い真奈美のために家事をこなす信二を尻目に、真奈美は浮気相手との情事に溺れる。ある日、真奈美が帰宅するとカレーライスの匂いが漂ってきた。一口口に入れて真奈美は思わずスプーンを持つ手を止めて――

（以前ここに公開していた作品を改訂して量を増やしたものです）

カレーライスだ。

鋼鉄製の重い玄関扉を開けてすぐに、部屋の空気から伝わってきた匂いで、真奈美は知った。幾種類かの香辛料と、野菜と、肉を煮込んだ重く鼻を刺激する匂い。鍋をかき混ぜる際に、お玉が鍋底に当たる微かな響き。冷蔵庫を開けてすぐ閉め、続けて冷凍庫を開けてすぐ閉める、彼女のビールを冷蔵庫から冷凍庫に移し替える音。玄関を入っただけでもう、真奈美の脳裏には白い皿に盛られたカレーライスと、良く冷えたビールが浮かんだ。

「おかえり」

玄関からまっすぐ伸びる廊下に、信二が顔だけ出した。台所に立って料理をしながら、玄関が開く音を聞くとすぐ左側のドアを開けて首を伸ばすように顔を出す。「おかえり」の一言を忘れずに。

かつては真奈美の習慣だったが、最近帰りが遅い彼女に代って夕食の支度をする信二が、いつの間にか彼女の習慣を真似るようになっていた。台所から出てくる信二の顔を見て、やっと帰った気になる。

「ただいま」

真奈美は顔だけの信二に返事をして、視線を上げずに彼の顔を通り越して寝室に向かった。台所のドアの隙間からずっと流れてきた空気で、信二が顔を引っ込ませ調理に戻るのを感じた。

三十度を超す日が続くが、節電を強制されているので、折角購入したUSB扇風機は仕事中使用えない。エアコンはやたら高めの設定温度で、団扇だけでは暑さを凌ぎ切れない。

ジャケットは身体に張り付いて湿り気を帯び、柔らかくなっていた。襟口に指を入れ、真奈美はふと、昨日のことを思い出した。ちょうど一日前、これと似たようなジャケットを、節くれだった太い指で強引に脱がされた。その下のカットソーも、ストレートパンツ

も、下着も全部脱がされ、シャワーも浴びないでダブルベッドに押し倒された。

炊飯器が、炊き上がりを告げる音を鳴らせた。真奈美は皮をはぐようにジャケットを脱いで、しわくちゃのままハンガーにかけた。深い皺が砂丘のように見えるタイトスカートとブラウスも同じようにかける。ショーツのずれを人差し指で直し、上はキャミソールのまま、下は部屋着の短パンに履き替え、洗面所に向かった。

「ごはん、もうできるよ」

「うん」

台所から顔だけ出た信二とのやり取りにも慣れた。真奈美は洗面所ではほとんど落ちかかった化粧をすっかり落とし、つい溜息を声に出してしまい無言で笑った。おじさんみたい。そういえばもうすぐ二十九だっけ、と今更のように「アラサー」の立場を意識する。

真奈美は鏡を見つめたまま、眉毛が薄くなった顔から指に眼差しを落とす。やや骨が目立つ細い指は、昨夜あの男を抱きしめていた。爪はあの男の背中に、いくつかの赤い線を作っていた。セックスの前にはシャワーを浴びるのは当たり前のことだった。それが当り前ではなくなったのはあの男に出会ってからだ。お互いの出すオスとメスの体臭を嗅ぎながらでないと、真奈美は性的な興奮を感じられないようになっていた。余りにもノーマル過ぎる信二とのセックスは、やんわりと拒否し続けてもう半年は経っていた。

仕事が遅くなったと深夜十二時近くになって帰宅した昨日、信二はまだ起きてお茶をすすっていた。あたかもそれは遊んで帰ってきた亭主を健気に待つ良妻のような、忠実さをはっきり示していた。真奈美は喜びの余韻が抜けきらない自らの身体を信二の目から隠すように、昨夜は足早に寝室に向かって、はぎ取るように着替え、そのままベッドに身を投げた。「シャワー浴びないの？」という信二の問いかけに、「疲れてるから、朝入る」とだけ答えた。ホテルを出る前にシャワーは浴びてきたから、男の匂いが残っていない自信があった。

真奈美が信二と一緒に暮らすようになったのは三年前だ。二十六の彼女が、二十九の彼に惚れる形で、彼のマンションに転がり込んだ。信二は温厚で、手を上げたり声を荒げることは皆無で、安定した夫婦同然の生活が続いた。夫婦との違いは、籍が入っていないだけだった。

最初こそ、真奈美は料理も掃除も洗濯も一人でこなしていたが、仕事が遅くなる日が増えたのと、家事よりも男と仕事で張り合うことにやりがいを感じていた真奈美は、信二の優しさに甘えて、徐々に家事を彼に任せていくようになった。信二は器用な男で、仕事の帰りもそれほど遅くならなかったので、進んで家事を受け持っていた。

器用とはいっても男なので、信二はそれほど料理が上手いわけではない。親子丼、煮込みうどん、豚汁、豚の生姜焼き、炒飯。鍋やフライパン一つでできる簡単なものばかりだったが、彼はどんな料理にも手間暇をしっかりとかけた。親子丼は卵を常温に戻してから作ったり、豚汁は玉ネギだけを圧力鍋で溶けるまで煮込み、その後他の食材を煮込んで玉ネギの甘みを活かした。真奈美は彼が作るカレーライスが特に好きだった。

信二は真奈美の好みに応じて作ってくれる。親子丼は半熟で、豚の生姜焼きは脂身を多めに。彼は木綿が好きなのに、豆腐は真奈美が好きな絹ばかり使ってくれた。真奈美は薬味があまり好きではないので、生に近いネギなどはほとんど入っていないかった。

しかしカレーだけは違った。真奈美は辛いのが好みだったが、彼は甘いカレーしか作らなかった。彼女は初めて彼が作ったカレーを食べる時、甘口が嫌いであると表情に出すことを厭わなかった。だが食べてみると予想以上にカレーはおいしかった。子供だましの単なる甘みではなく、玉ネギの溶けた味、隠し味の味醂、白ワイン、色々な味が混ざって合計された甘さが、真奈美は心地良かった。

「今日も、疲れちゃった」

真奈美は台所のテーブルに座り、長い髪を後ろで一つにまとめながら、背中を向けて夕食の支度をする信二に声をかけた。テーブルには既に二人分のカレーとサラダ、スープが用意されており、彼は冷凍庫からビールとグラスを出すところだった。

「お疲れさま」

信二は福神漬をルーとご飯の境目によそいながらそう言った。

続けて彼は缶ビールを、凍って白く濁ったグラスに注ぐ。受け取ったグラスを彼のグラスに軽く打ちつけ、乾いた唇の奥に一気に流しこんだ。

「ん……おいし」

唇に泡を残しながら上目遣いに彼を見ると、カレーライスを食べながら自分を見つめる彼の瞳は、台所の照明を受けて輝いていた。その輝きは、いつも通りの彼の優しさに思えた。

信二という男は、当初こそ恋人だったが、今は真奈美にとって夫でもなく、婚約者でもなく、内夫でもなかった。同居人、非常に馬が合う同居人と言うのが適切だろう。仕事が遅くなる日は家事をこなして待っていてくれる、こんな好都合の同居人は他にいなかった。

信二は温厚で柔和なタイプだが、無口で面白みはなく、決して女にもてるタイプではなかった。三年前、真奈美が信二に惚れたのは、彼の優しさに惹かれたからだ。それまで、彼女の周りには自己中心的で粗暴な男しかいなかったから、信二の優しさは彼女を魅了した。一緒に暮らすのは信二のような男が良かったけれど、真奈美のパートナーとしての、彼女が本能をむき出しにする対象としての相手は、もっと野性的な男が適していた。今、真奈美が週に二回は肉体関係を結んでいる男は、二つ下で毛むくじゃら、彫りが深い男で、ベッドの上では彼女を天国にでも見知らぬ世界にでも連れて行ってくれるが、それ以外は全く話にならず、レストランの予約さえまともにできない無能な輩だった。

信二は、あたしと結婚したいんだろうな。真奈美は薄々感づいていた。自分の言うことを何でも聞いてくれ、自分に合わせてくれる。

嫌な言い方だが、媚を売っているとれなくもなかった。真奈美は結婚などする気はなかった。子供も作る気はない。男と同じように仕事をして、家庭や子育てに縛られることなく生きたかった。けれども信二との同棲生活を失うのは惜しかった。彼のように家事をしてくれる男がいなければ、真奈美は自分のしたいように生きられる自信がなかった。だからこそ、内縁関係を続けながら、肉体の喜びは他の男から与えてもらう現在が、彼女にとって最良の選択肢に思われた。「結婚しよう」と言われたら、仕事が一段落するまでもう少し待ってほしいと答えるつもりだった。女は結婚すると男と張り合えないと見なされるから、納得いく仕事ができるまで待って、と。そう言ってしまうえば信二は何も言い返せないだろう。真奈美は彼の優しさを自分の方程式に当てはめて答えを導き出し、内縁関係の継続は確固たるものになったと思った。

「……？」

カレーライスをすくったスプーンの一口目に、真奈美は声を出しそうになった。ビール一杯程度の酔いでは、舌の上で感じた衝撃はごまかせなかった。

カレーライスには甘さがなかった。彼女が元来好む、スパイスの刺激が強い辛みがあった。いつも通りの、甘めのつもりで多めに口に含んでしまったから、舌への刺激が強過ぎた。気付けばビールばかりを口に運んでいた。

「もう一本、ちょうだい」

「大丈夫？ 明日も仕事でしょう？」

「いいの。大丈夫」

二本目のビールはグラスの温度が上がってややぬるくはなったけれど、口を含むと胸の奥に酔いが浸透していく痺れを感じた。酔いに勢いをもらって食べたカレーの二口目は、やはり辛さに対しての違和感しかなかった。汗が首筋を細く伝うのが分かった。

「おいしくない？」

「ううん。今日は、ゆっくり食べたいの」

そう言ってみたものの、彼女が好きであるはずの辛口カレーライスは、食べようとしても中々口に入っていかなかった。ビールの二本目が空く頃になっても、やっと三口が食べ終わっただけだった。湯気をもうもうと上げていたカレーは表面が膜を張って固まっていた。

福神漬の甘さが、カレーライスの辛さを少しは打ち消してくれるかと思って、真奈美は色のついたレンコンを、大根を、茄子を、カレーライスと一緒に多めにスプーンの端に乗せた。それを口に運んで咀嚼したが、やはり家で食べる辛口のカレーには馴染めなかった。そういえば、少し前に外で食べたカレーの話を、信二にしたことがある。日本庭園が見える高級ホテル一階のレストランで、三千円もするカレーを食べたのだが、それがかなりの辛口で、大層おいしかった。そのカレーの話をすると信二は、辛いのは苦手だけど、今度僕も食べてみたいと言った。信二には勿論話していないが、真奈美がそのカレーを食べている目の前には、堀が深いあの男が座っていた。かちやかちかと食器を打ち鳴らして食べる男に舌打ちをしたのを思い出し、何だかおかしくなって笑ってしまったわけ。

辛口のカレーがもうこれ以上食べられなくなり、真奈美はスプーンを皿に立て掛けるように置いた。乾いた音が小刻みに打ち鳴らされ、自分が震えていることが分かった。目の前には信二が、いつもと少しも変わらない笑顔で彼女を見つめていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4531v/>

カレーライス

2011年10月9日01時08分発行